

牧師所感： 老 齡 牧 師 の 独 白

私は老齡牧師である。牧師の務めを満 70 で終り、一般社会の老齡による退職者のように、年金で老後を悠々と暮らす身分ではない。

牧師と言っても老後の生活に心配のない牧師は例外である。だが老後の生活に備えない牧師とか、私もそうである。が、70 で隠退（キリスト教会）する前から、もし健康が許されるならば、死を迎えるまで福音を宣べ伝えたい、という一心で神に祈った。

幸い余力があったので、老後の牧会が許された。以来 開拓伝道を始めて 23 年間 田舎牧会に従事出来たことを感謝している。

さて何年前、コロナ禍発祥以後、牧師である私の健康も次第に問題になってきた。高血圧・前立腺肥大による症状等、これらの症状と戦いながら牧会を続けている。

でもこの程度でひるむことはない。それで、韓国在住の知り合いのお医者様に（90）症状を伝えた所、お医者様曰く、「先生と同じ年齢の人々の 95% が他界、5% が健在ですよ、^へ^へき」とそっけない返事であった。

さて、明日は待ちに待っていた 主の日（日曜日）である。牧師は御言葉を 宣べ伝えなければならない。週明けの月曜日から次の御言葉を準備しなければと思い、資料を準備するが、土曜日になってやっとまとまる。

愛についての聖句が示された。「コリント第一の手紙 13：1～13」愛の讃歌の主題である。準備中 シモーン・ヴェイユ（ユダヤ人、女流作家）の愛の詩が思い出された。
^こ茲にその詩を掲載する。

“愛”

愛は私を招いたが、私の魂は埃と罪にまみれているので、しりぞいた。
しかしするどいまなこの愛は、私が入ったときから尻込みしているのを見て、私に近付き、なにかたりないものがあるのかと、やさしくたずねた。

「ここにふさわしい客がおりません」と私は答えた。

愛は言った、「おまえがなるのだよ」と。

「よこしまで、恩しらずの、この私が？」

ああ、最愛の人よ、私はあなたを見つめることもできません。」

愛は私の腕をとり、ほほえみながら答えた。

「その目を作ったのは、私でなくてだれだろう？」

「主よ、おっしゃるとおりです。でも、私は目を汚しました。

私の羞恥心がそれにふさわしいところにおもむきますように。」

愛は言った、「だれがそのとがを引きうけたか、知らないのか？」

「最愛の人よ、私にあなたのご用をさしてください。」

「座って、私の料理を味わうがよい。」と、愛は言った。そこで、私は座り、食べた。

おわりに、齡を取ってくると愛の感情も年を取るのか、鈍くなってくる。自誠する。